教会の誕生日

今日はペンテコステというお祭りの礼拝を神様にお捧げしています。さて、ではこのペンテコステというのは、何を記念するお祭りの日でしょうか。実はペンテコステというのは、教会が生まれたことを記念する日、つまり教会のお誕生日です。先程司会の方が読んでくれた聖書箇所には、この日に起こった出来事が細かく記されています。どんなことが書いてあったでしょうか。詳しく聖書を見ていきましょう。

今日の聖書個所よりも少し前の箇所、使徒言行録 1：4～5 で、イエス様は天へと挙げられる前、弟子たちに、「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられる」と言い残しておられました。イエス様のこの御言葉を信じて、当時、イスカリオテのユダの代わりにマティアを新たに加えた 12 使徒を初め、120 人ほどの人々はエルサレムで一緒に集まって神様を礼拝しながら、イエス様が約束してくださった聖霊が降ってくるのを熱心に待っていたのです。

そして、五旬祭(ペンテコステ) というユダヤ教のお祭りの日になりました。この日もイエス様のお弟子さんたちは、今の私たちのように、神様を礼拝するために集まっていました。するとどうでしょう。突然、激しい風が吹いてくるような音が響いてきて、炎のような舌が分かれ分かれに現れて一人ひとりの上に留まったのです。お弟子さんたちに聖霊(神様の霊) が降ってきました。すると、お弟子さんたちは色々な国の言葉を話し始めました。お弟子さんたちに聖霊が降って来た時の激しい物音に「なんだ、なんだ」と集まって来た人々は、お弟子さんたちがこんなふうに色々な国の言葉で話しているのを見てびっくりしました。そんな人々に、ペトロさんは聖書の御言葉からイエス様について説き明かしをします。人々はペトロさんのその力強い説教を聞くと、三千人もの人々がイエス様のことを信じて洗礼を受け、お弟子さんたちの仲間になりました。こうして今の教会が生まれて、聖霊に満たされたお弟子さんたちが、イエス様のことをみんなに告げ知らせるためにそれぞれ神様に遣わされていくように

なったというのがペンテコステのお話です。

毎年ペンテコステの日にはこうした説明をしているわけですが、しかし最近、ある牧師のペンテコステについてのこんなお話を読みまして、私はハッとさせられました。

「ペンテコステは『教会の誕生日』と言われることがあります。聖霊が降り、教会がそこから始まったということです。けれども厳密に言えば、教会はそれ以前から弟子たちの群れというかたちで存在していたのです。そして弟子たちも(欠けてしまったイスカリオテのユダの代わりにマティアを選出するなど)自分たちの教会を見つめ直し、それを整えることに関心を寄せていたことが分かります。そうであるとすれば、ペンテコステというのは、教会の生まれた日というよりも、弟子たちの群れである教会に聖霊が下り、弟子たちが外部の人々に向かって福音を大胆に語り始めた日であったというほうがふさわしいように思います。すなわちペンテコステとは『教会の宣教が始まった日』と言うべきだろうと思うのです。」

ペンテコステ以前に、既に教会という群れは存在していた。礼拝も行われていた。ペンテコステというのは厳密には「教会の宣教が始まった日」。こうした文章を読みまして、この日をあえて私たちは「教会の誕生日」としていることに、私は大きな意味があるように感じたのです。つまり、教会という建物ができれば、そこで教会が生まれたと言うのではない。教会という礼拝する人の群れができていれば、そこで教会が生まれたと言うのでもない。神様を賛美する人の群れができて、そこで宣教が始まってこそ教会に魂が吹き込まれると言いますか、生きた教会が生まれるのだということでしょう。

ですから、宣教というのは教会にとって本当に大事です。毎主日ごとの礼拝を中心に、宣教の業をどこまでも広く行っていかなければなりません。ところで、「宣教」というのははたして何でしょう。よく似た言葉に「伝道」というものがありますが、これとはどう区別されるのでしょう。その答えは、牧師や神学者によっても様々なのが

実情です。

たとえばプロテスタント教会が編集した『キリスト教大事典』では、「伝道」という項目にこのように記されています。「伝道:キリストの福音を、未知未信の人々に伝え、その人々を信徒とする教会のわざをいう。現在では宣教という用語が同じ意味で用いられることが多い。両者を区別する場合には、宣教は教会のすべての働きを包括する広義のものとして、伝道は未信者を信徒にすることを直接目的とする働きに限定して用いられる。」

一方、カトリック教会が編集した『新カトリック大事典』では、「宣教」という項目でこのように記されています。「宣教 : 広義では、主イエス・キリストにおける神の人類と世界の永遠の救いの働きという『大いに喜ばしい訪れ』(ルカ 20 : 10 参照) を人々に告知し、彼らを悔い改めの回心と信仰の喜びへと導く、言葉と行いによる教会の一切の活動をいう。宣教は、主キリストによって命令された教会の本質的使命である。狭義では、いまだキリストの福音の恩恵を知らない人々に、福音の訪れを告げ、人々が自発的に信仰するよう呼びかける活動、とくに言葉による福音宣教を指す。かつてプロテスタント教会では広義の宣教と狭義の宣教を区別し、狭義の宣教を伝道といっていたが、現代では宣教と伝道はほとんど同義語となっている。」

これらを見ただけでも、「宣教」とは何か、それは「伝道」とはどう違うのかという定義がややこしいことが分かります。私はプロテスタント教会の古い理解をしている人間なのでしょうか、「宣教」と言えば、人々に神様の愛と福音とを知らせるための教会の働きすべてを意味しているような、そんな広い意味で「宣教」という言葉を理解しています。そして、「伝道」を、未信者を信徒にする働きという狭い意味で捉えています。しかし、『新カトリック大事典』によると、現代では「宣教と伝道はほとんど同義語」だそうです。

ただいずれにしても強調しておきたいのは、私が教会にとって本当に大事だと言っ

た「宣教」という言葉を広い意味で理解してほしいということです。ペンテコステは「教会の宣教が始まった日」。宣教が始まってこそ生きた教会が生まれる。その「宣教」という言葉に、「信徒獲得」という狭い意味しか認めない、認めるべきではないと考える人々が一定数います。特に東京という所はそういう理解の根強い所です。かつて教団紛争時代、人々が互いに「社会派」・「教会派」、「宣教派」・「礼拝派」などと言い合って対立していた名残でしょう。東京というのはかつて「教会派」、「礼拝派」の人々が根強く、いわゆる「社会派」、「宣教派」の人々を、社会問題ばかりに熱心になって教会のことを疎かにする人々と批判し、反発していた地域ですから、未だに教会は信徒獲得に専念して社会問題に関わるべきではないのだ、そんなことをすると人々が暴徒化するのだという理解が根強くあります。しかし私は、これは非常にナンセンスだと思います。

教会が「信徒獲得」という狭い意味での「宣教」しかしないなら、教会は主のご委託に十分に応えることはできず、この世界から必要とは見なされずに捨てられていくことでしょう。結果、神様の愛と福音とを十分に光り輝かせていくことはできません。私たちは知っています。礼拝を大切にしていくことも、社会の課題を担っていくことも、共に欠かすことのできない「宣教」のわざだということを。社会問題ばかりに取り組んで、教会のことを疎かにするのが決して「宣教」ではないし、逆に礼拝や集会しかしないで信徒獲得ばかりに躍起になるのも私たちが目指すべき十分な「宣教」理解とは言えません。礼拝や集会も、社会の課題を担っていくことも、どちらも大切にしてこそ、教会は生きたものとなり、私たちは神様の救いの働きを人々に知らしめ、人々を神様のもとに豊かに導いていくことができるのです。

今日から始まっていく聖霊降臨節のシーズン、こうした広い「宣教」理解で神様の御心を豊かに行っていきましょう。聖霊の導きのもと、この府中の地で神様の愛と福音とをどこまでも広く光り輝かせていきたいと願います。

祈りましょう。天の神様、今日はペンテコステです。今からおよそ 2000 年前にあなたが弟子たちに降してくださった聖霊を、今の私たちにも豊かに降してください。そして、私たち教会を豊かにお導きください。私たちの広い宣教の業がどこまでもあなたによって祝されますように。この一言の祈りを、貴き主イエス・キリストの御名を通してあなたの御前にお捧げ致します。アーメン。